

わたしの 効果倍増! 教材活用術

※新学社単元テスト付録・冊子型テストです。7年度では「学力調査型テスト」という名称で発行されます。

「※総合テスト」を活用して

三重県津市立高野尾小学校教諭 岩脇 真輔

1. はじめに

子どもたちが満足感や達成感を得るために、私たち教師は日々試行錯誤しています。子どもたちが新しい知識を得て、理解した時の楽しみ、そして、その知識を生かして問題を解いていくことの楽しみを見出すために、様々な授業が展開されています。

ただ、授業の中では知識が獲得されても、なかなか定着することが難しく、中には応用問題に発展していけない子どももみられます。また、問題を解けないことの辛さから、授業が苦手になったり、嫌いになったりしてしまうこともあります。

そういった子どもたちをなくすためにも、授業での発問から習熟するまでの過程を大切にしていかななくてはならないと感じます。そして、子どもたちがその単元に自信をもてるようになるためには、自分自身の力で問題を解ける力が備わっていくべきではないでしょうか。

子どもたちが自信をもつためには、教科書

だけでなく、「くりかえしドリル」や単元テストで、基礎的な問題や応用問題に取り組みことも大切であると感じます。

ドリルでは、あまり悩むことのないような基礎的な問題を多く取り入れているものを個人的に好んでいます。どうしても、ドリル学習となると、空いた時間や家庭学習にすることが多く、ひとりでする場合が多くなってしまいます。だからこそ、ひとりでする達成感や満足感を味わうためにも、基礎的な問題が出題されているものがよいと考えます。

また、ドリル学習は、学んだことを定着させるために欠かせないものです。子どもたちが正しい知識を獲得するためにも大切であると感じます。さらに、テストで生まれる自信につなげるためのドリルの活用方法も探りながら、取り組んでいきます。

テストでは、単元ごとのまとめテストだけでなく、「総合テスト」といったテストも使っています。こちらのテストを使用するまでに至る取り組みも、後に述べたいと思います。

2. 4年生の実態

算数では、4年生になると二段階思考・三段階思考で、見通しをもって問題解決をすることが必要になります。計算問題でも文章題でも、「たし算だけ・かけ算だけ」という思考から、「たし算をしてからかけ算」「ひき算をしてわり算、さらにたし算」というように、段階的に問題解決を進める力が必要になってきます。

このように問題を解くためには、まず、問題で何をきかれているのかを把握し、解決のための見通しをもつ力が必要になります。

私のクラスには、問題で何をきかれているのかを把握できずに、かけ算をするべきなのか、わり算をするべきなのか理解できず、行き詰まってしまう子どもが多くいます。また、基礎的な計算をすることすら難しい子どももいます。そうした子どもたちのためにも、「くりかえしドリル」の学習で基礎的な力をつけたり、反復で問題をこなしたりしてきました。また、問題数が少なく、基礎的な問題を多く取り入れたワークも利用しました。学習した直後に取り入れたことで、復習としての効果を発揮したように感じます。その結果、算数の基礎的な力もついていきました。

その力を、最終的に「総合テスト」で生かすことができるように、たくさんの方のサポートを踏みながら実践してきました。

日々の授業で使う教材や教具。

隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？

このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

3. 活用例

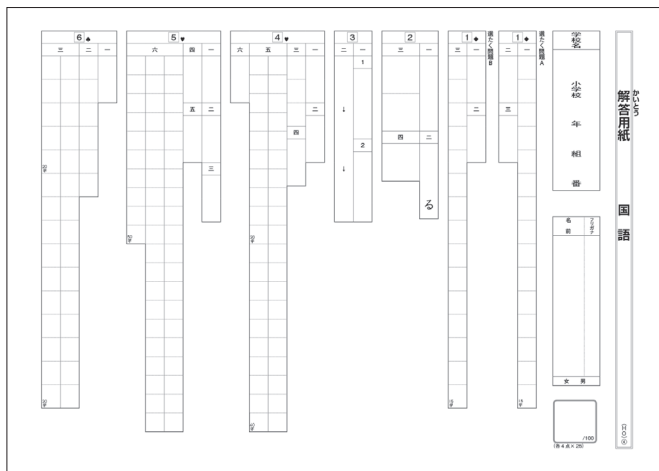
(1) 「総合テスト」の良さ

このテストは、子どもたちが普段行っているテストとは様々なことが違います。

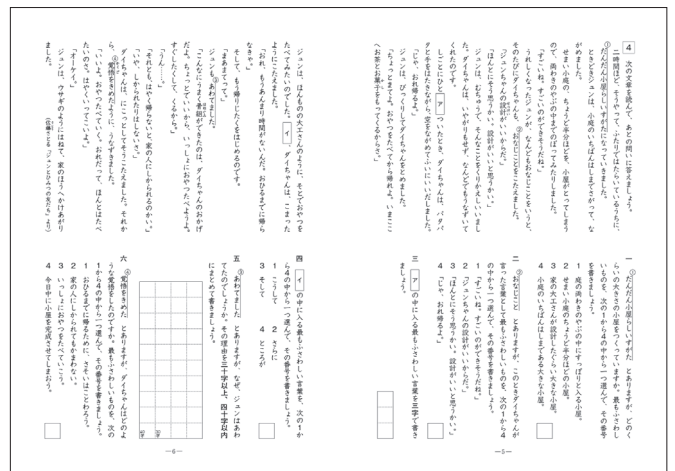
まずは、単純に見た目です。子どもたちはそれだけで身構えてしまうところもあります。が、それと同時に「ようしし！」と、やる気になる子どもがたくさんいます。

次に、問題の内容です。国語のテストでは、「三字で書きましょう」または、「十五字以内で書きましょう」といった、字数制限がされている問題もあり、子どもたちにとってはなかなか触れることのないような問題も問われることがあります。前に述べたように、何をきかれているかをきちんと把握しないと解けない問題もあるので、しっかりと問題文を読む習慣が大切です。

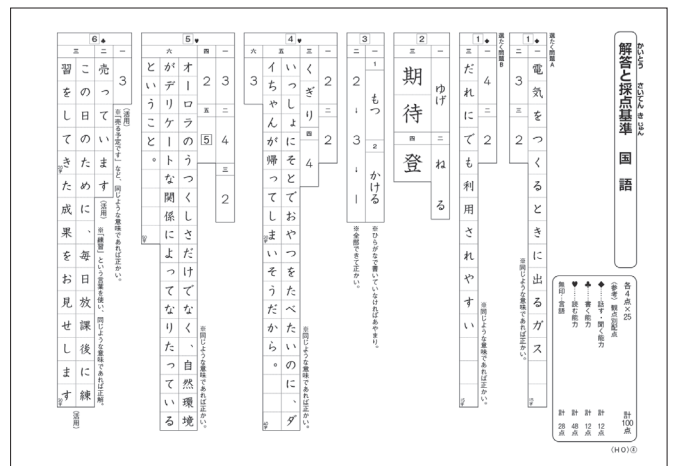
最後に、問題用紙と解答用紙が分かれていることです。子どもたちが慣れ親しんでいる単元テストは、問題と解答欄が同時に並んでいるため、視線を他に移すことなく問題に取り組みます。しかし、この「総合テスト」は、問題用紙と解答用紙が離れているため、どうしてもあっちゃこっちゃを見なければなりません。そういった作業が、新鮮でやる気になると同時に、子どもたちに必要な力として備わっていくべきだと思います。



▲解答用紙



▲新卒社の26年版「総合テスト(国語4年)」・問題用紙



▲解答・採点基準

(2) テストを進めるにあたって

学期の終わりに実施を試みました。子どもたちも、「今学期努力してきた成果を出そう」と、やる気になっていくように感じました。

なお、テストを進めるにあたっては、問題用紙と解答用紙が分かれているため、問題用紙には書き込みを行う活動をさせています。

テストでは、問題できかれている箇所にサイドラインを引く子どもや、物語の要旨を簡単にまとめ、自分にとってわかりやすくする

子どももいます。

また、普段の授業で、答えを説明するために子どもたち自身が用いる図や計算式などを、テストでも生かしていくことを伝えました。

このように、解答用紙には最終的な答えを書くようにし、問題用紙を自分なりにわかりやすく整理するために使えることも、問題用紙と解答用紙が分かれている利点ではないでしょうか。

(3)採点と直しの活動

私自身は、教師側で採点してしまうので、試したことはないですが、解答用紙には答えしか書いてないので、子どもたち自身が採点をしてほとんど間違えることなくできると思います。

その後の授業でも、間違った問題に対して、問題用紙にサイドラインやメモがたくさんしであるので、どの段階で間違ったのか、または、きかれていること自体を読み間違えていたのかを追究することができます。

子どもたち自身が自分の考えを見返す活動の必要性というものを、この「総合テスト」を通じて知ることができました。

さらに、いろいろな出題の形態が用意されているこのテストには、子どもたちの習熟度が測れるという利便性もあります。

4 おわりに

学習を進めるにあたり、授業をする教師として大切なことは、「たくさんの内容にふれ、経験をさせる場面」と、「ひとつのことにじっくり取り組む場面」を使い分けることだと考えます。もちろん両方ともが大切なことは言うまでもありません。

ただし、どんなに魅力的な授業内容で、子どもたちがたくさん発表し、活動のある授業になったとしても、ドリルの問題がわからなかったり、テストで思うような点数が取れなかったりすると、子どもの中には、苦手な単元という印象だけが残ってしまうこともあります。

だからこそ、基礎的な知識を習得することとはもちろん、発展的な問題に意欲的に取り組み、そのような問題が解けたときの達成感や満足感を味わわせることを目標に取り組んでいくべきだと感じます。今回の「総合テスト」を実施したことで、子どもの表情からは、「いつもと違うテストで、難しい問題を解くことができた」といった達成感も感じ取れました。

私は、国語科では、学年ごとの新出漢字を習得すること、そして、文章を読み味わうことができるように、内容をつかむ力を養っていくべきであると考えています。

また算数科では、4年生までに既習した学習に新たな知識を上乗せしていき、二段階思

考・三段階思考で問題を解決していく力を付けていきたいと考えています。その中で、「もっと速く、もっと正確に、もっと簡単に」という目標に向かって思考を練り上げるものだと考えています。

最後に、子どもたちは、自分がわかる問題は自信をもって発表したり、問題を解いたりしていきます。自信というものは、授業の中で発表したり友達に教えたりすること、そしてテストで達成感を得ることなど、様々なところでついていくものです。だからこそ、教師の声かけはとも大きなものがあると感じています。子どもが失敗してしまった時、成功した時の励ましや、ほめる言葉。これこそが、子どもたちに自信をつける大きな手立てであると思います。

そういった子どもたちの姿を見落とすことなく授業をしていくことが、子どもたちが自信をもつて、どんな問題にも意欲的に取り組めるようになることにつながるのではないのでしょうか。

そんな思いで、子どもたちの国語や算数の力が向上することを願って、日々指導を続けています。